

—— 奈良県中学校教育課程研究集会
中学校外国語部会

学習指導要領改訂と
英語教育改革の動向について

奈良県教育委員会事務局学校教育課 指導主事 藤井 仁

平成28年7月29日（金）

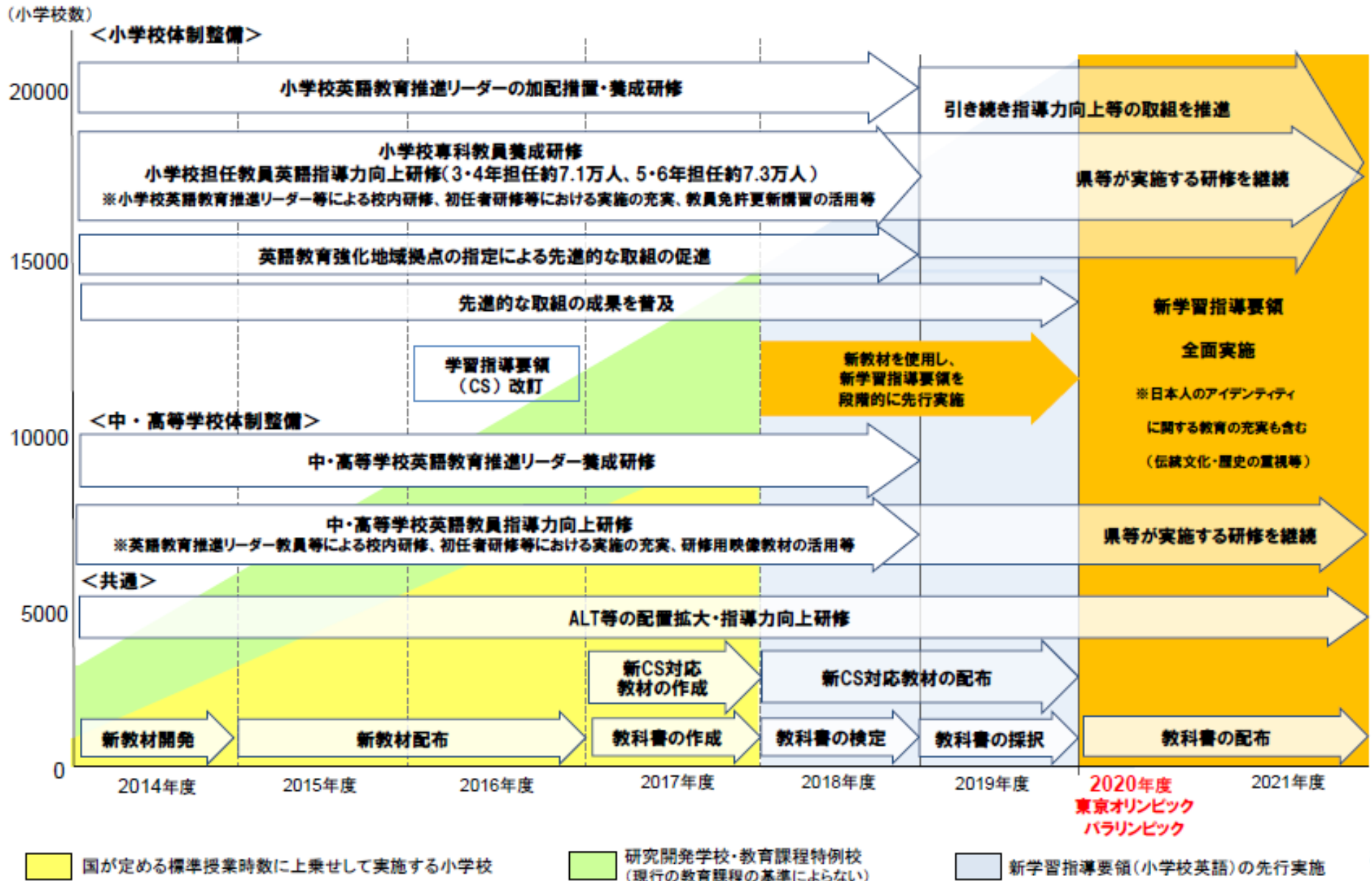
これまでの中教審の議論の経過と今後のスケジュール

平成26年11月	中央教育審議会総会 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」諮問
平成26年12月	教育課程部会 ・ <u>教育課程企画特別部会</u> を設置
平成27年 1月	教育課程企画特別部会（第1回） ↓ 新しい時代にふさわしい学習指導要領の基本的な考え方や、 教科・科目等の在り方、学習・指導方法及び評価方法の在り 方等に関する基本的な方向性について、計14回審議
平成27年 8月	教育課程企画特別部会（第14回） 教育課程部会 ・「論点整理」をとりまとめ
平成27年 秋以降	論点整理の方向に沿って教科等別・学校種別に専門的に検討
平成28年	教育課程部会又は教育課程企画特別部会における議論を踏まえて、審議のまとめ
平成28年度内	中央教育審議会として答申

（小学校は32年度から、中学は33年度から全面実施予定。高校は34年度から年次進行により実施予定。）

1 次期学習指導要領改訂の方向性

グローバル化に対応した英語教育改革実施計画スケジュール（文部科学省）



次期学習指導要領改訂に向けた検討体制

中央教育審議会教育課程部会

教育課程企画特別部会

幼児教育部会

小学校部会

中学校部会

高等学校部会

特別支援教育部会

総則・評価特別部会

国語ワーキンググループ

言語能力の向上に関する特別チーム

外国語ワーキンググループ

社会・地理歴史・公民ワーキンググループ

高等学校の地歴・公民科目
在り方に関する特別チーム

算数・数学ワーキンググループ

高等学校の数学・理科にわたる
探究的科目の在り方に関する特別チーム

理科ワーキンググループ

芸術ワーキンググループ

家庭、技術・家庭ワーキンググループ

情報ワーキンググループ

体育・保健体育、健康、安全ワーキンググループ

考える道徳への転換に向けたワーキンググループ

生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ

特別活動ワーキンググループ

産業教育ワーキンググループ

学習指導要領改訂の方向性（案）

平成28年5月23日
教育課程部
総則・評価特別部会
資料3-1

新しい時代に必要な資質・能力の育成

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な知識や力を育む

「社会に開かれた教育課程」の実現

各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

何を学ぶか

新しい時代に必要な資質・能力を踏まえた
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共（仮称）」の新設など

各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示す

学習内容の削減は行わない※

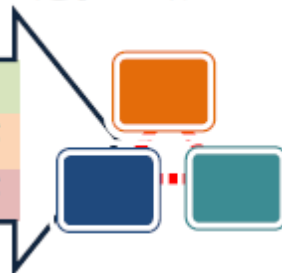
どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得
など、新しい時代に求められる
資質・能力を育成

知識の力を削減せず、質の高い
理解を図るための学習過程
の質的改善

深い学び
対話的な学び
主体的な学び



1 次期学習指導要領改訂の方向性 – 何を学ぶか

CEFR

B2

B1

A2

A1

※CEFRとは、シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編纂のために、透明性が高く分かりやすく参照できるものとして、20年以上にわたる研究を経て、2001年に欧州評議会（Council of Europe）が発表。

英語教育の抜本的強化のイメージ

※具体的な小学校の授業時数については、年内～年明けを目途に教育課程全体の構成とともに検討を進め、一定の方向性を提示

新たな英語教育

成熟社会にふさわしい我が国の価値を海外展開したり、厳しい交渉を勝ち抜く人材の育成

大学や海外、社会で英語力を伸ばす基礎を確実に育成

高校卒業レベルで3000語

高で1800語

中で1200語

現状

【高等学校】

○目標：コミュニケーション能力を養う
○授業は英語で行うことが基本
国の目標（英検準2～2級程度等50%）
→現状32%
・生徒の学習意欲、「書く」「話す」に課題
・言語活動が十分でない

【中学校】

教科型を通じた4技能の総合的育成
○目標：コミュニケーション能力の基礎を養う
○前回改訂で週3→週4に増
国の目標（英検3級程度等50%）→現状35%
・言語活動が十分でない

活動型 【小学校高学年】 年間35単位時間
○目標：「聞く」「話す」を中心としたコミュニケーション能力の素地を養う
○学級担任を中心に指導
外国語活動が成果を上げ、児童の「読む」「書く」も含めた系統的な学習への知的欲求が高まっている状況
年間35単位時間（週1コマ程度）

【高等学校】

目標例：例えば、ある程度の長さの新聞記事を速読して必要な情報を取り出したり、社会的な問題や時事問題など幅広い話題について課題研究したことを発表・議論したりすることができるようにする

- 授業を英語で行うことを基本とするとともに、①4技能を総合的に扱う言語活動、②特に、課題がある「話すこと」、「書くこと」において発信力を強化する言語活動を充実（発表、討論・議論、交渉等）

高等学校基礎学力テスト（仮称）
改善のためのPDCAサイクル

【中学校】

目標例：例えば、短い新聞記事を読んだり、テレビのニュースを見たりして、その概要を伝えることができるようにする

- 身近な話題について理解や表現、情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。互いの考えや気持ちなどを英語で伝え合う対話的な言語活動を重視した授業を英語で行うことを基本とする

年間140単位時間

4技能学力調査
改善のためのPDCAサイクル

教科型

【小学校高学年】

【小学校】

目標例：例えば、馴染みのある定型表現を使って、自分の好きなものや、家族、一日の生活などについて、友達に質問したり質問に答えたりできるようにする

- 「聞く」「話す」に加え、「読む」「書く」の育成も含めたコミュニケーション能力の基礎を養う。
- 学級担任が専門性を高め指導、併せて専科指導を行う教員を活用、ALT等を一層積極的に活用

教科として系統的に学ぶため、効果的な「繰り返し学習」としてモジュール学習も活用

年間70単位時間 ※

活動型

【小学校中学年】

- 目標：「聞く」「話す」を中心としたコミュニケーション能力の素地を養う

- 主に学級担任がALT等を一層積極的に活用したT・Tを中心とした指導

年間35単位時間 ※

教科型 【小学校高学年】 年間70単位時間

目標例：例えば、馴染みのある定型表現を使って、自分の好きなものや家族、一日の生活などについて、友達に質問したり質問に答えたりできるようにする。

○「聞く」「話す」に加え、「読む」「書く」の育成も含めたコミュニケーション能力の基礎を養う。

○学級担任が専門性を高め指導、併せて専科指導を行う教員を活用、ALT等を一層積極的に活用。

教科として系統的に学ぶため、効果的な「繰り返し学習」としてモジュール学習も活用。

活動型 【中学年】 年間35単位時間

○目標：「聞く」「話す」を中心としたコミュニケーション能力の素地を養う

○主に学級担任がALT等を一層積極的に活用したT・Tを中心とした指導。

【中学校】

目標例：例えば、短い新聞記事を読んだり、テレビのニュースを見たりして、その概要を伝えることができるようにする。

○ 身近な話題について理解や表現、情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。

互いの考えや気持ちなどを英語で伝え合う対話的な言語活動を重視した授業を英語で行うことを基本とする。

【高等学校】

目標例：例えば、ある程度の長さの新聞記事を速読して必要な情報を取り出したり、社会的な問題や時事問題など幅広い話題について課題研究したことを発表・議論したりすることができるようにする。

○ 授業を英語で行うことを基本とするとともに、①4技能を総合的に扱う言語活動、②特に、課題がある「話すこと」、「書くこと」において発信力を強化する言語活動を充実（発表、討論・議論、交渉等）

1 次期学習指導要領改訂の方向性 – 何ができるようになるか

育成すべき資質・能力の三つの柱（案）

学びに向かう力
人間性等

どのように社会・世界と関わり、
よりよい人生を送るか

「確かな学力」「健やかな体」「豊かな心」を
総合的にとらえて構造化

何を理解しているか
何ができるか

知識・技能

理解していること・できる
ことをどう使うか

思考力・判断力・表現力等

育成すべき資質・能力の三つの柱（外国語WG6/15案）

◎外国語やその背景にある文化を尊重し、外国語の見方・考え方を働かせ、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、簡単な情報や意見などの交換などのコミュニケーションを行うことができる資質・能力を次のとおり育成する。

①【知識・技能】 外国語を通じて、言語の働きや役割などを理解し、外国語の音声、語彙・表現、文法を、4技能（聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと）において実際のコミュニケーションの場面で運用できる技能を身に付ける。

②【思考力・判断力・表現力等】 外国語で具体的に身近な話題についての理解や表現、簡単な情報や意見などの交換などができるコミュニケーションの力を養う。

③【学びに向かう力・人間性】 他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。

主体的・対話的で深い学びの実現（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）について（イメージ）（案）

平成28年5月9日
教育課程部会
高等学校部会
資料8（会議後修正）

○「論点整理」におけるアクティブ・ラーニングの視点

【深い学び】

習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか。

【対話的な学び】

他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。

【主体的な学び】

子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。

総則・評価特別部会及び各教科等WGの議論を踏まえ、以下のように整理できるのではないかと

【深い学び】

習得・活用・探究の見通しの中で、教科等の特質に応じて育まれる見方・考え方を働かせて思考・判断・表現し、学習内容の深い理解や資質・能力の育成、学習への動機付け等につなげる「**深い学び**」が実現できているか。

【対話的な学び】

子供同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自らの考えを広げ深める「**対話的な学び**」が実現できているか。

【主体的な学び】

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる「**主体的な学び**」が実現できているか。

資質・能力の育成と

主体的・対話的深い学び（「アクティブ・ラーニング」の視点）の関係（イメージ）（案）

- ◆「アクティブ・ラーニング」の視点は、知識・技能を生きて働くものとして習得することを含め、育成すべき資質・能力を身につけるために必要な学習過程を実現するためのもの。こうした三つの視点※を明確にすることにより、授業やカリキュラムの改善に向けた取組を活性化するもの。 ※三つの視点は、学習過程の中で相互に関連し合うものであることに留意
- ◆学習内容の量を削減するのではなく、学習過程の質的改善を行うもの。また、生きて働く知識・技能の習得を含む資質・能力の獲得には、学習内容の深い理解が不可欠であり、「主体的な学び」「対話的な学び」のみならず「深い学び」の重要性にも留意。

「カリキュラム・マネジメント」を通じて他教科等の学習過程とも連携

「アクティブ・ラーニング」の3つの視点からの
学習過程の質的改善

深い学び

対話的な学び

主体的な学び

知識・技能

思考力・判断力・
表現力等

学びに向かう力・
人間性

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性の涵養

※「習得・活用・探究の見通し」とは、習得された知識・技能が思考・判断・表現において活用されるという一方通行の過程のみではなく、思考・判断・表現を経て知識・技能が生きて働くものとして習得される過程や、思考・判断・表現の中で知識・技能が更新されたりする過程なども含む。

※基礎的・基本的な知識・技能の習得に課題が見られる場合においては、教科等の特質に応じ、知識・技能の習得を中心とした学習を、「深い学び」の前提として習得状況に応じ行う必要がある。その際には、例えば「主体的な学び」の視点から学びへの興味や関心を引き出すことなども併せて重要である。

「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善

「深い学び」の過程

言語の働きや役割に関する理解、外国語の音声、語彙・表現、文法の知識や、それらの知識を4技能において実際のコミュニケーションで運用する技能を習得し、実際に活用して、情報や自分の考えなどを書いたり話したりする中で、資質・能力の三つの柱に示す力が総合的に活用・発揮されるようにする。このため、授業において、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じた言語活動を効果的に設計することが重要である。

(中学校 外国語科)

○具体的で身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができる能力の育成

→互いの考えや気持ちなどを外国語で適切に伝え合う対話的な言語活動を重視し、単に自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えたり、出来事や体験したことなどについて書いたりするだけでなく、聞いたことや読んだことを基に問答したり意見を述べ合ったりすることや、感想、賛否やその理由を書いたりすることなど、複数の技能を統合した言語活動を豊富に経験することが重要。

「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善

「対話的な学び」の過程

他者を尊重し、対話的な学びを通じて社会や世界との関わりを通じて情報や考えなどを伝え合う言語活動の改善・充実を図ることが重要である。このため、次期改訂においては、言語の果たす役割として他者とのコミュニケーション（対話や議論等）の基盤を形成する観点を資質・能力全体を貫く軸として重視しつつ、創造的思考とそれを支える論理的思考、感性・情緒を育成する観点からも求められる資質・能力が明確になるよう整理することを通じて、外国語教育の改善・充実を図る。

（中学校 外国語科）

○中学校段階で育成すべき「思考力・判断力・表現力等」

→「互いの考えや気持ちなどを理解し、根拠を持って外国語で伝え合う力」であることをより明確にする。

他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、外国語でコミュニケーションを図ろうとする態度などを育成することについて明確にする。

「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善

「主体的な学び」の過程

外国語を学ぶことに興味や関心を持ち、どのように社会・世界と関わり、生涯にわたってどのように学んだことを生かそうとするかについて、見通しを持って粘り強く取り組むとともに、自分の意見や考えを発信したり、評価したりするために、自らの学習活動を振り返って次の学習につなげることが重要である。このため、外国語教育においては、この学びの実現に向けて、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確に設定し、学習の見通しを立てたり振り返ったりする場面を設けるとともに、発達段階に応じて、身の回りのことから社会や世界との関わりを重視した題材を設定することなどが考えられる。

1 次期学習指導要領改訂の方向性 - どのように学ぶか 中学校外国語科 見方・考え方（外国語WG6/15案）

小学校 外国語活動(3・4年生)

外国語やその背景にある文化を尊重し、他者との関わりの側面から言語を捉え、目的・場面・状況等に応じて、外国語で情報や考えなどを形成・整理・再構築し、それらを活用して、外国語を話したり書いたりして適切に表現し伝え合うために考えること。

小学校 外国語科(5・6年生)

外国語やその背景にある文化を尊重し、他者との関わりの側面から言語を捉え、目的・場面・状況等に応じて、外国語で情報や考えなどを形成・整理・再構築し、それらを活用して、外国語を話したり書いたりして適切に表現し伝え合うために考えること。

中学校 外国語科

外国語やその背景にある文化を尊重し、他者との関わりの側面から言語を捉え、目的・場面・状況等に応じて、外国語で情報や考えなどを形成・整理・再構築し、それらを活用して、外国語を話したり書いたりして適切に表現し伝え合うために考えること。

1 次期学習指導要領改訂の方向性

観点別学習状況の評価について

- 学習評価には、児童生徒の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能。
- 各教科においては、学習指導要領等の目標に照らして設定した観点ごとに学習状況の評価と評定を行う「目標に準拠した評価」として実施。
⇒きめの細かい学習指導の充実と児童生徒一人一人の学習内容の確実な定着を目指す。

学力の3つの要素と評価の観点との整理

【現行】

学習評価の 4 観点

関心・意欲・態度

思考・判断・表現

技能

知識・理解

【以下の3観点に
沿った整理を検討】

学力の3要素 (学校教育法) (学習指導要領)

知識及び技能

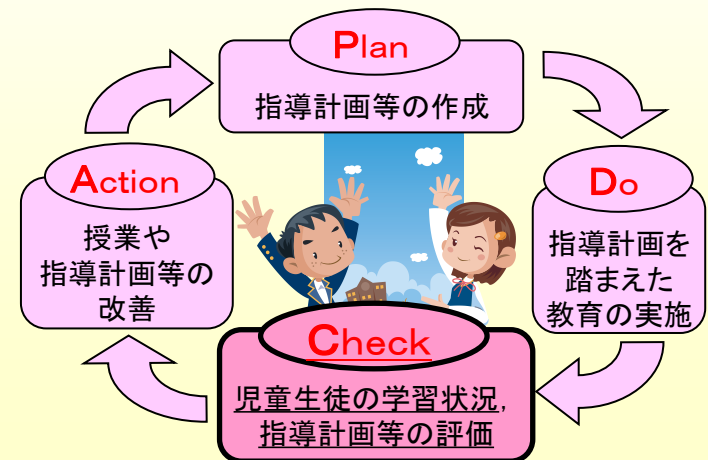
思考力・判断力
・表現力等

主体的に学習に
取り組む態度

学習指導と学習評価のPDCAサイクル

- 学習評価を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ること、学校における教育活動を組織として改善することが重要。

指導と評価の一体化



学習評価の改善に関する今後の検討の方向性

各教科等の評価の観点のイメージ（案）

<p>観点（例）</p> <p>※具体的な観点の書きぶりは、各教科等の特質を踏まえて検討</p>	<p>知識・技能</p>	<p>思考・判断・表現</p>	<p>主体的に学習に取り組む態度</p>
<p>各観点の趣旨のイメージ（例）</p> <p>※具体的な記述については、各教科等の特質を踏まえて検討</p>	<p>（例）</p> <p>〇〇を理解している／〇〇の知識を身に付けている</p> <p>〇〇することができる／〇〇の技能を身に付けている</p>	<p>（例）</p> <p>各教科等の特質に応じ育まれる見方や考え方をを用いて探究することを通じて、考えたり判断したり表現したりしている</p>	<p>（例）</p> <p>主体的に知識・技能を身に付けたり、思考・判断・表現をしようとしていたりしている</p>

これからの教育課程の理念

＜社会に開かれた教育課程＞

- ① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会づくりを目指すという理念を持ち、教育課程を介してその理念を社会と共有していくこと。
- ② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合っていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化していくこと。
- ③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

カリキュラム・マネジメントの3つの側面

- ① 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していく。
- ② 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立する。
- ③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせる。

学習指導要領改訂のポイント(「教育の強靱化に向けて」平成28年5月10日)

急激な社会的変化の中でも、子供たちに未来の創り手となるために必要な知識や力を育むため、以下のような方向性で学校の教育課程を充実。

- 「ゆとり教育」か「詰め込み教育」かといった、二項対立的な議論には戻らない。知識と思考力の双方をバランスよく、確実に育むという基本を踏襲し、**学習内容の削減を行うことはしない。**

高校教育については、些末な事実に知識の暗記が大学入学者選抜で問われることが課題になっており、そうした点を克服するため、重要用語の整理等を含めた高大接続改革等を進める。

- 学校教育のよさをさらに進化させることを目指し、「学校教育を通じてどのような力を育むのか」を明確にして育成する。

「**アクティブ・ラーニング**」の視点は、**知識が生きて働くものとして習得され、必要な力が身に付くこと**を目指すもの。知識の量を削減せず、質の高い理解を図るための**学習過程の質的改善**を行う。

①対話的・②主体的で③深い学び、の三つが「アクティブ・ラーニング」の視点。特に「深い学び」こそが質の高い理解に不可欠。

- こうした方向性のもと、必要な教科・科目構成等の見直しも行う(小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共(仮称)」等の新設など)。

**本年度中に学習指導要領を改訂し、
2020年から順次実施。**

高等学校は来年度改訂

「英語教育の在り方に関する有識者会議」報告(概要)
小学校高学年教科としての目標イメージ

外国語活動

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

小高学年教科

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、身近で簡単なことについて外国語の基本的な表現に関わって聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

中学校

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

「英語教育の在り方に関する有識者会議」報告(概要)
小学校高学年教科としての目標イメージ

(1) 身近で簡単なことについて話される初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。

(2) 身近で簡単なことについて、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。

(3) アルファベットや単語に慣れ親しみ、英語を読むことに対する興味を育てる。

(4) アルファベットを書くことに慣れ親しみ、英語を書くことに対する興味を育てる。

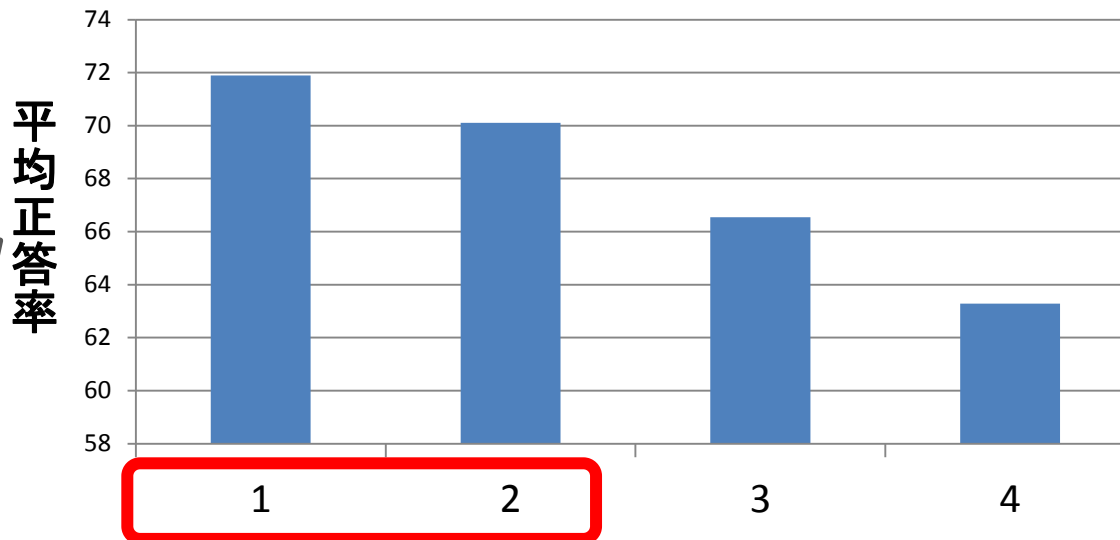
(生徒質問紙調査)

〈肯定的な回答ほど、平均正答率が高いもの〉

下のグラフにおいて、「家で復習をしている」と答えた生徒ほど平均正答率が高く、「復習をしていない」と答えた生徒ほど平均正答率が低い。

質問に対する回答結果と平均正答率との間に、このような関係が見られるものを紹介する。

家で、学校の授業の復習をしていますか



国語と数学の相加平均

平均正答率

- 1 している
- 2 どちらかといえばしている
- 3 どちらかといえばしていない
- 4 していない

(生徒質問紙調査)

〈肯定的な回答ほど、平均正答率が高いもの〉①

○家庭学習状況

- ・家で、自分で計画を立てて勉強をしている。
- ・家で、学校の授業の復習をしている。
- ・疑問に思ったことは自分で調べてみようと思う。

○自尊感情

- ・ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある。
- ・自分は、先生から認められていると思う。
- ・自分には、よいところがあると思う。

(生徒質問紙調査)

〈肯定的な回答ほど、平均正答率が高いもの〉②

○規範意識

- ・学校の規則を守っている。
- ・友達との約束を守っている。
- ・学校では、先生に挨拶をしている。

○社会に対する興味・関心

- ・地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある。
- ・テレビのニュース番組やインターネットのニュースを見ている。
- ・家庭で、地域や社会で起こっている問題や出来事を話題にしている。

(生徒質問紙調査)

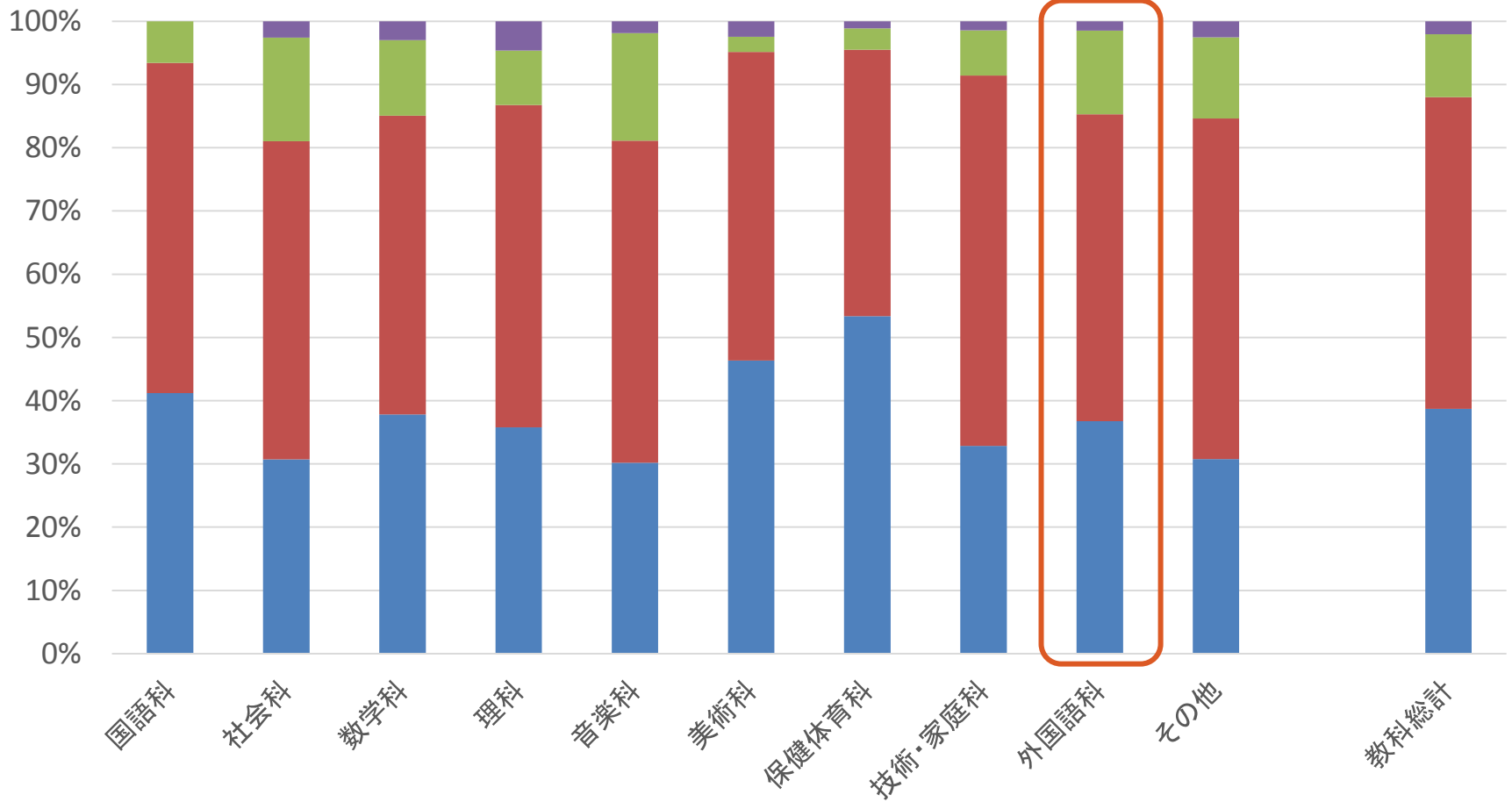
〈肯定的な回答ほど、平均正答率が高いもの〉③

○授業において

- ・小学校では、自分の考えを発表する機会が与えられていたと思う。
- ・小学校では、授業のはじめに目標(めあて、ねらい)が示されていたと思う。
- ・小学校では、授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思う。

(教員質問紙調査)

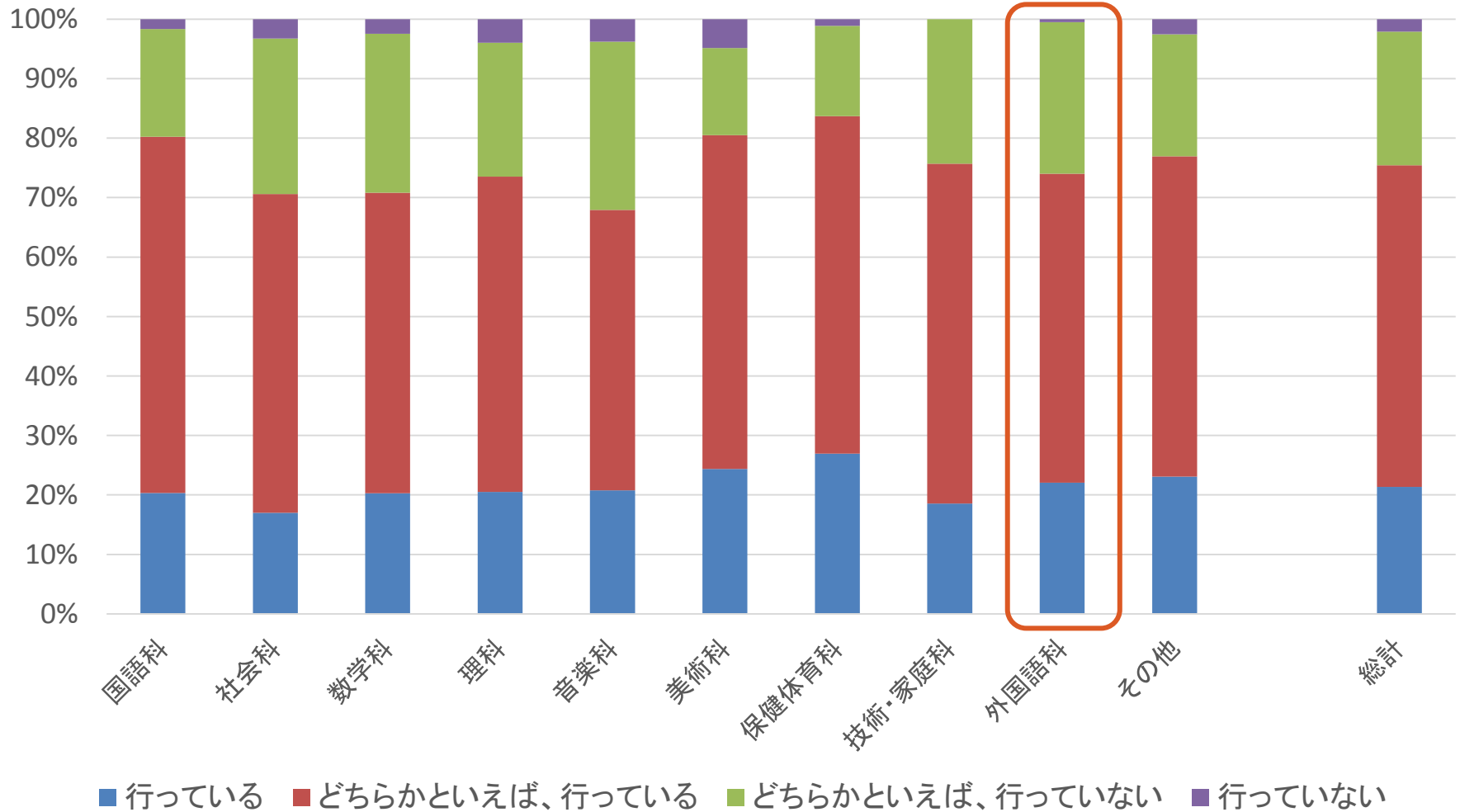
授業のはじめに目標を示していますか



■ 示している ■ どちらかといえば、示している ■ どちらかといえば、示していない ■ 示していない

(教員質問紙調査)

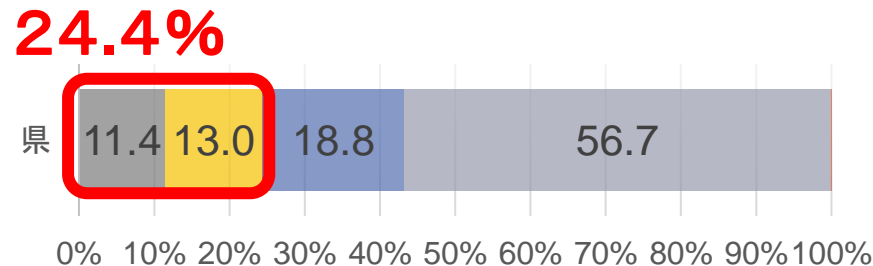
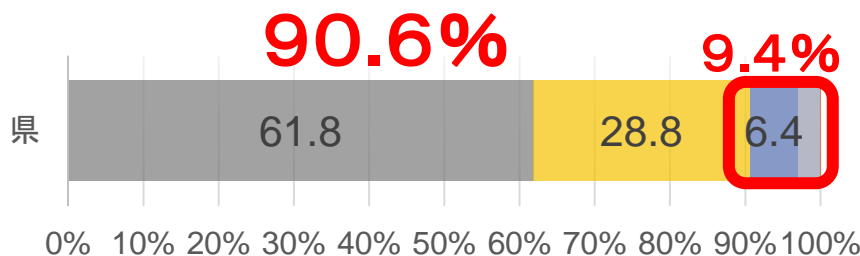
授業の最後に学習内容を振り返る活動を行っていますか



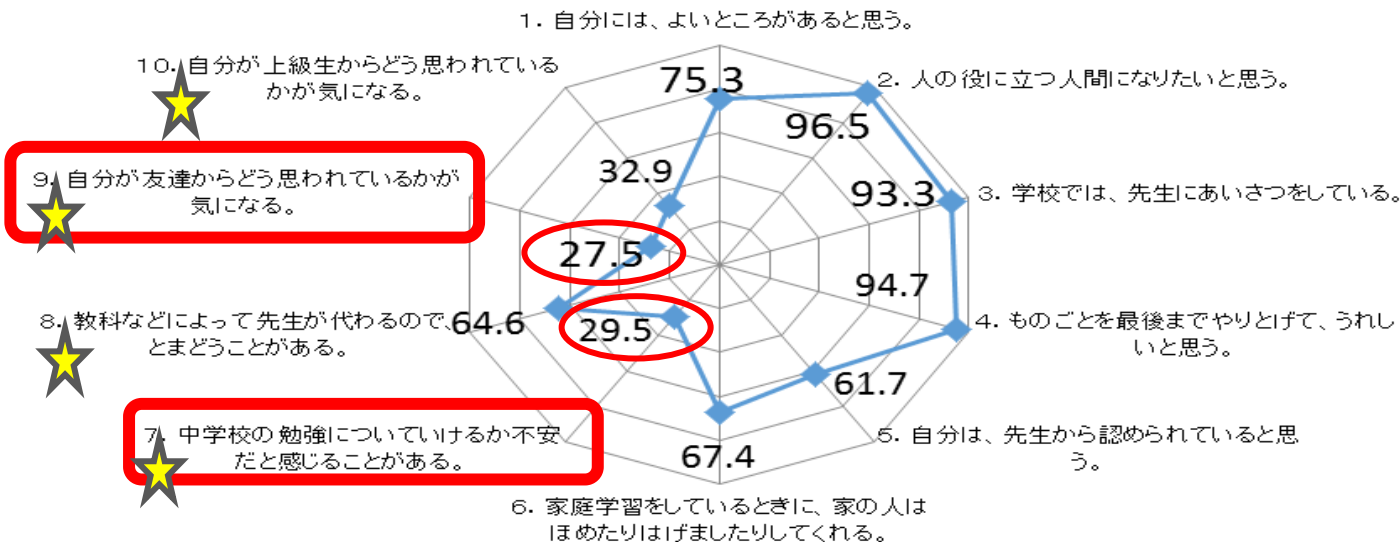
(生徒質問紙調査)

○ 学校に行くのは楽しいですか。

○ 学校に行けない、または、行きたくないと思うことがありますか。



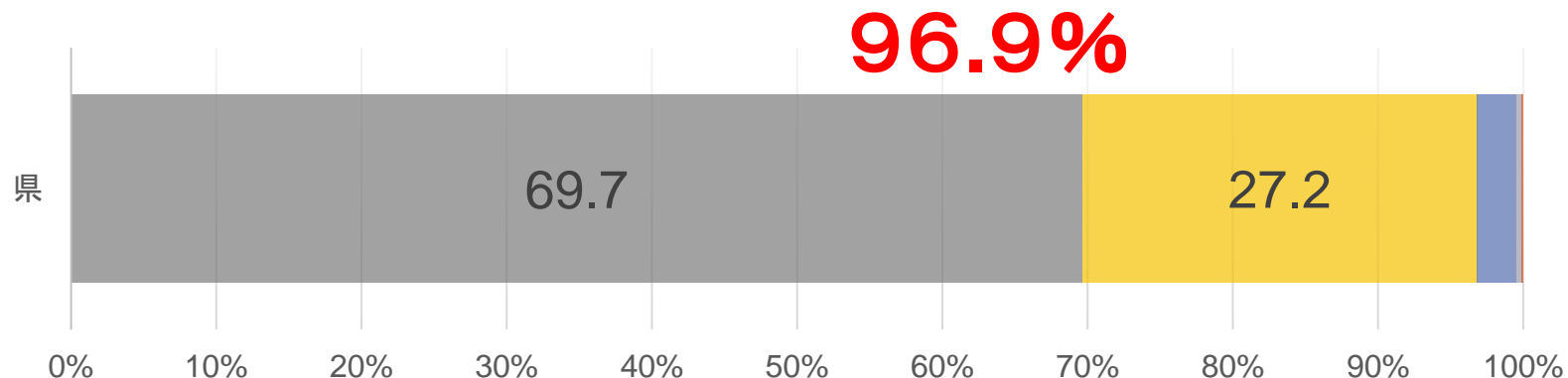
生徒質問紙調査 (県平均)



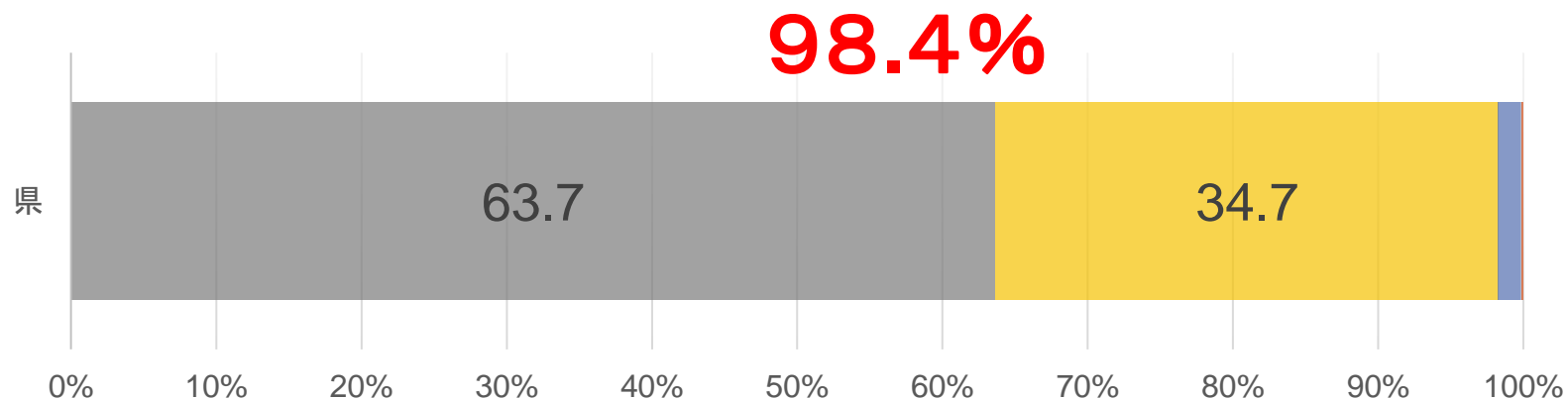
※設問1～10のうち、
1～6は、「思う」、「どちらかといえば思う」と回答した生徒の割合の合計
7～10は、「どちらかといえば思わない」、「思わない」と回答した生徒の割合の合計 を表す。

(教員質問紙調査)

○ 生徒に学校や地域で挨拶をするよう指導していますか。

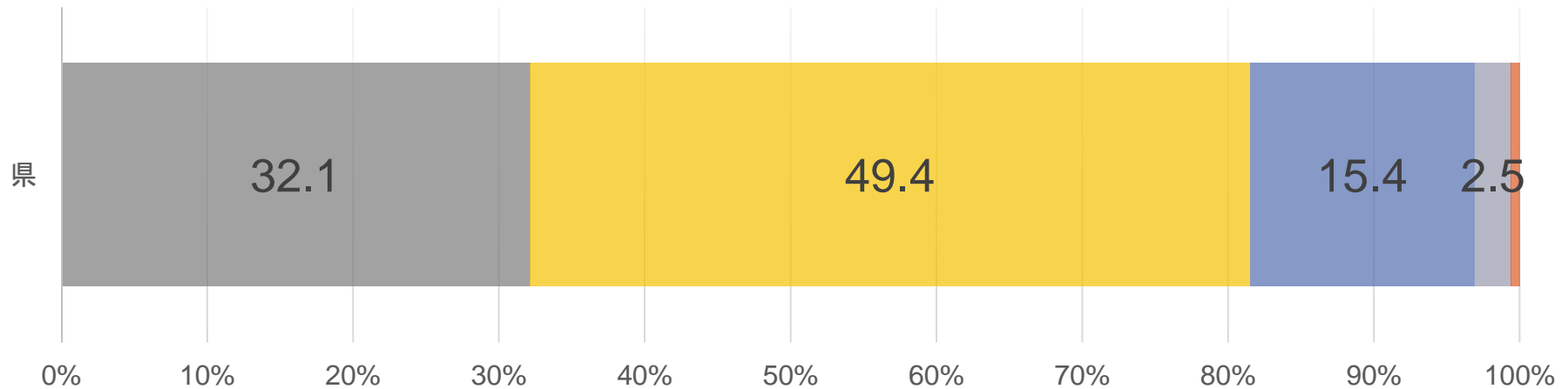


○ 学校では、生徒のよいところを見つけ、褒めていますか。

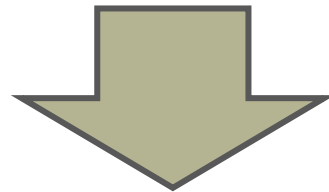


(教員質問紙調査)

- 学校全体の学力傾向や課題について、他の職員と共有していますか。



奈良県学力・学習状況調査、全国学力・学習状況調査



自校の生徒の実態を共有

教職員の一一致した指導

(全国)

平成27年度 生徒・教員の英語力及び指導状況について

■ 生徒の英語力について、目標としている英語力を達成している

生徒は公立中学3年生で約36.6%(約34%)、公立高校3年生で約34.3%(約32%)

○中学校卒業段階：初歩的な英語を聞いたり読んだりして話し手や書き手の意向などを理解したり、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話したり書いたりすることができる。(英検であれば3級程度以上)

○高等学校卒業段階：英語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりすることができる。(英検であれば準2級～2級程度以上)

■ 英語教員の英語力についても、目標を達成している教員は

公立中・高それぞれ約30.2%及び約57.3%。

○生徒の英語によるコミュニケーション能力を育成するため、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とすることができる。(英検準1級以上、TOEFLのPBT550点以上、CBT213点以上、iBT80点以上またはTOEIC730点以上)

■ 授業中、発話を半分以上英語で行っている英語教員は、公立中学校3年生担当で

約54.8%、公立高校3年生(コミュニケーション英語Ⅰ)担当で約49.6%。

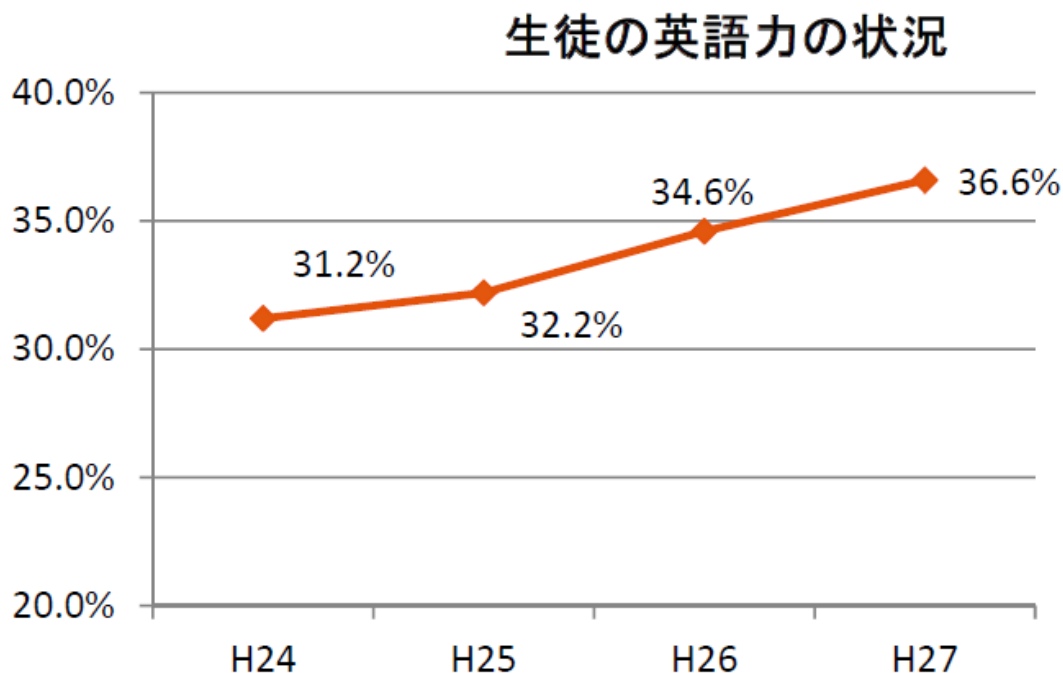
■ 「CAN-DOリスト」により学習到達目標を設定している学校は、公立中・高それぞれ約

51.1%(31.2%)及び約69.6%(58.3%)。

※「CAN-DOリスト」とは、英語を使って実際にどのようなことができるようになるのか、その能力を記述したものを指す。

生徒の英語力の状況

- 中学校第3学年に所属している生徒のうち、英検3級以上を取得している生徒は18.9%で、平成26年度の18.4%から0.5ポイント上昇している。
- 英検3級以上を取得してはいないが、相当の英語力を有すると思われる生徒は17.7%で、平成26年度の16.3%から1.4ポイント上昇している。
- 両者を合わせると36.6%となり、平成26年度の34.7%から1.9ポイント上昇している。



◆ 英検3級以上を取得している生徒及び相当の英語力を有すると思われる生徒の割合

※H24の数値は『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』に係る状況調査の結果に基づく。

※「第2期教育振興基本計画」では、中学校卒業段階で英検3級程度以上を達成した中学生の割合50%を目標とする。

「全国学力・学習状況調査における中学校の英語の実施に関する中間まとめ」
(文部科学省)より

生徒の英語力

(英検3級取得済み及びその力があると思われる生徒の割合)

1	千葉県	52.1%
2	秋田県	48.6%
3	東京都	47.9%
4	石川県	47.8%
5	福井県	42.7%
6	神奈川県	41.9%
7	埼玉県	41.6%
8	鳥取県	40.7%
9	群馬県	40.4%
9	京都府	40.4%
25	奈良県	34.1%
	全国平均	36.6%

平成27年度公立中学校・中等教育学校(前期課程)における英語教育実施状況調査
(文部科学省)より

(参考) 平成27年度中学3年生の英語力について (アンケート調査より)

英検3級程度 (CEFR: A1レベル上位) の生徒が約3割

英検3級程度以上 (CEFR: A1レベル上位) の公立中学校3年の生徒数について教育委員会を通じてアンケートを実施

23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
30%	31%	31%	35%	36%

【中学校及び中等教育学校 (前期課程)】

	中学校第3学年に所属している生徒数…(a)	(a)の内、英検を受験したことがある生徒数…(b)	(b)の内、英検3級以上を取得している生徒数…(c)	(a)の内、英検3級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数 [(c)以外]…(d)	(c)と(d)の計
生徒数及び割合	1,074,886人 (1,078,270人)	381,307人 (356,841人)	202,816人 (198,182人)	190,155人 (175,417人)	392,971人 (373,599人)
	((a)に占める割合)→	35.5% (33.1%)	18.9% (18.4%)	17.7% (16.3%)	36.6% (34.6%)

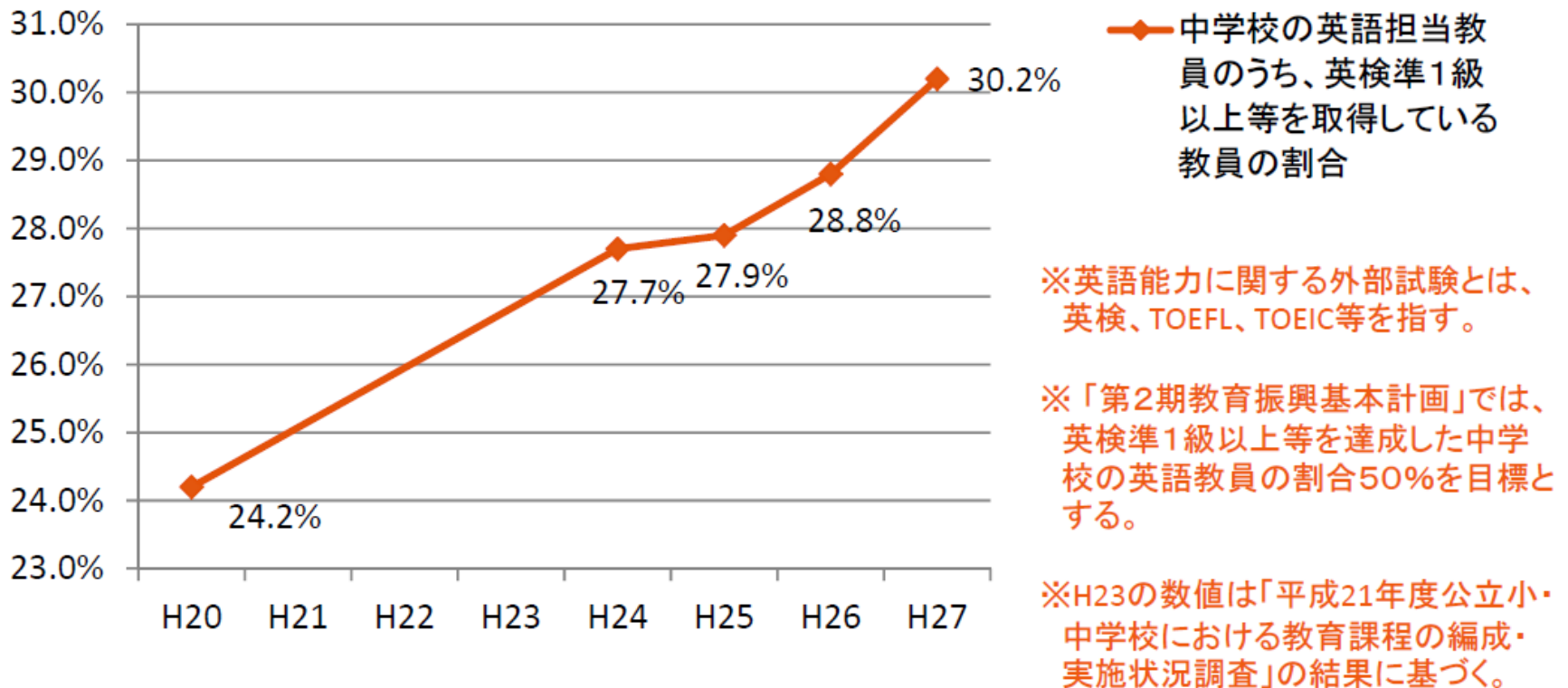
注) 「英検3級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数」とは、英検3級以上は取得していないが、相当の英語力を有していると英語担当教員が判断する生徒の人数を指す。

「全国学力・学習状況調査における中学校の英語の実施に関する中間まとめ」
(文部科学省)より

中学校教員の英語力の状況

- 中学校の英語担当教員のうち、英検準1級以上又はTOEFL PBT 550点以上、TOEFL CBT 213点以上、TOEFL iBT 80点以上又はTOEIC 730点以上を取得している者の割合は30.2%で、平成26年度の28.8%から1.4ポイント上昇している。

中学校教員の英語力の状況



「全国学力・学習状況調査における中学校の英語の実施に関する中間まとめ」
(文部科学省)より

教員の外部試験取得率

(英検準1級、TOEFL550点、TOEIC730点程度以上)

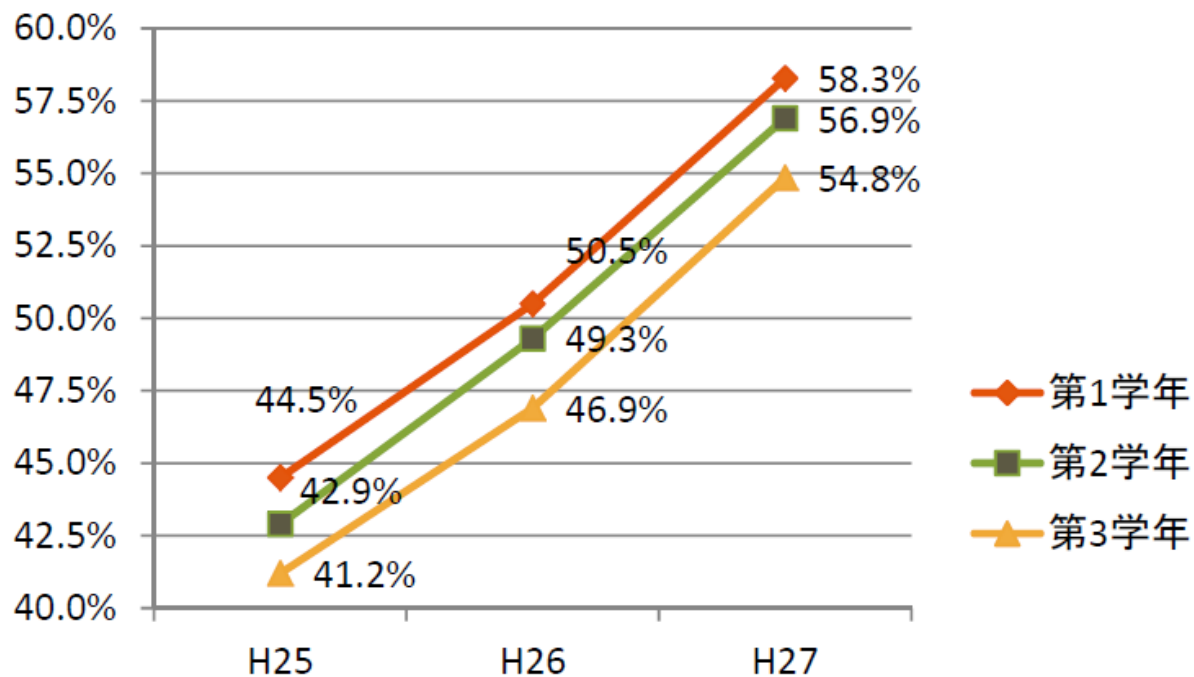
1	福井県	51.7%
2	富山県	48.7%
3	東京都	45.3%
4	石川県	41.8%
5	広島県	41.1%
6	徳島県	41.0%
7	神奈川	36.6%
8	滋賀県	35.9%
9	愛知県	34.5%
10	沖縄県	34.2%
37	奈良県	25.3%
	全国平均	30.2%

平成27年度公立中学校・中等教育学校(前期課程)における英語教育実施状況調査
(文部科学省)より

授業における英語担当教員の英語使用状況

- 「発話をおおむね英語で行っている」と「発話の半分以上を英語で行っている」を合わせた教員の割合が、第1学年では58.3%で、平成26年度の50.5%から7.8ポイント上昇、第2学年では56.9%で、平成26年度の49.3%から7.6ポイント上昇、第3学年では54.8%で、平成26年度の46.9%から7.9ポイント上昇している。

英語担当教員の英語使用状況



「全国学力・学習状況調査における中学校の英語の実施に関する中間まとめ」
(文部科学省)より

授業の発話の半分以上を英語で行っている教員の割合

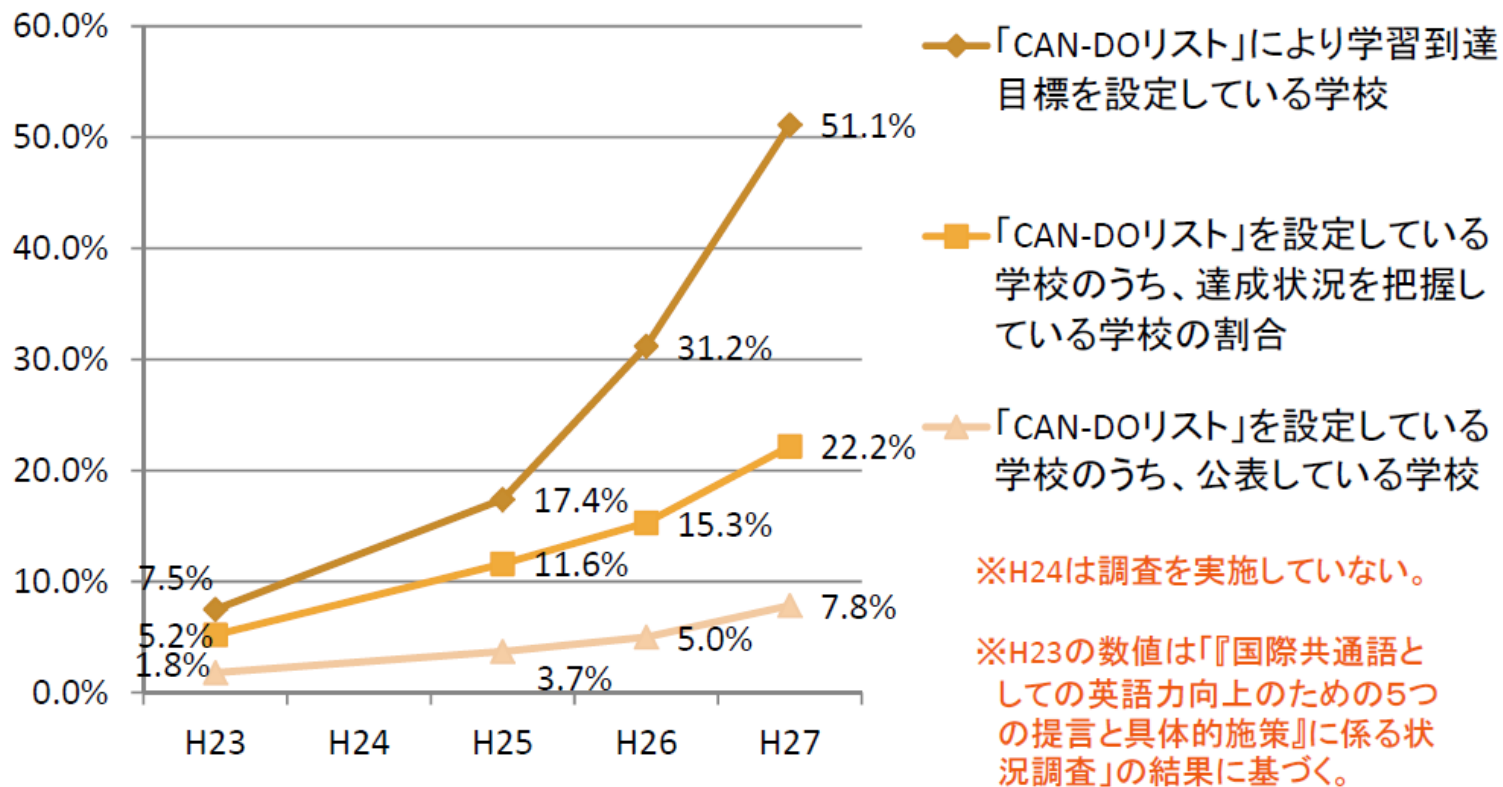
	1年	2年	3年	全学年
1 秋田県	88.5%	88.7%	92.3%	89.9%
2 石川県	84.4%	81.6%	78.1%	81.2%
3 香川県	81.8%	77.4%	76.7%	78.7%
4 岐阜県	78.2%	76.0%	77.6%	77.2%
5 埼玉県	74.2%	73.4%	70.7%	72.7%
6 栃木県	75.0%	71.6%	70.6%	72.4%
7 群馬県	73.0%	69.8%	70.3%	71.0%
8 茨城県	70.1%	70.5%	69.1%	69.9%
9 福井県	72.5%	69.4%	67.6%	69.8%
10 東京都	71.7%	67.8%	68.2%	69.5%
47 奈良県	29.5%	26.5%	22.8%	26.5%
全国平均	58.3%	56.9%	54.8%	56.7%

平成27年度公立中学校・中等教育学校(前期課程)における英語教育実施状況調査
(文部科学省)より

「CAN-DOリスト」による学習到達目標の設定

- 「CAN-DOリスト」により学習到達目標を設定している学校は51.1%で、平成23年度の7.5%から43.6ポイント上昇、平成26年度の31.2%から19.9ポイント上昇している。
- 「CAN-DOリスト」により学習到達目標を設定している学校のうち、22.2%の学校では、設定した学習到達目標の達成状況を把握しており、平成23年度の5.2%から17ポイント上昇、平成26年度の15.3%から6.9ポイント上昇している。

「CAN-DOリスト」による学習到達目標の設定・公表・達成状況の把握



「全国学力・学習状況調査における中学校の英語の実施に関する中間まとめ」
(文部科学省)より

「CAN-DOリスト」による 学習到達目標の設定状況

1	岩手県	100.0%
1	秋田県	100.0%
1	茨城県	100.0%
1	石川県	100.0%
1	福井県	100.0%
1	岐阜県	100.0%
1	鳥取県	100.0%
1	島根県	100.0%
1	山口県	100.0%
1	徳島県	100.0%
1	高知県	100.0%
12	沖縄県	95.9%
13	熊本県	90.4%
43	奈良県	23.1%
	全国平均	51.1%

平成27年度公立中学校・中等教育学校(前期課程)における英語教育実施状況調査
(文部科学省)

「CAN-DOリスト」による学習到達目標の設定

○ 「CAN-DOリスト」とは？

- ・ 英語を使ってどのようなことができるのかについて、「～できる」という形式で記述した学習到達目標
- ・ 4技能について、卒業時、各学年末の到達目標として活用
- ・ 児童・生徒に示すことで、学習到達目標を明確にする

○ 「CAN-DOリスト」の有効性

- ・ 指導者にとっては、
 - ① 指導目標の具体化
 - ② 指導の振り返り
 - ③ 学習者の評価

- ・ 学習者にとっては、
 - ① 学習目標の具体化
 - ② 学習の振り返り
 - ③ 自己評価

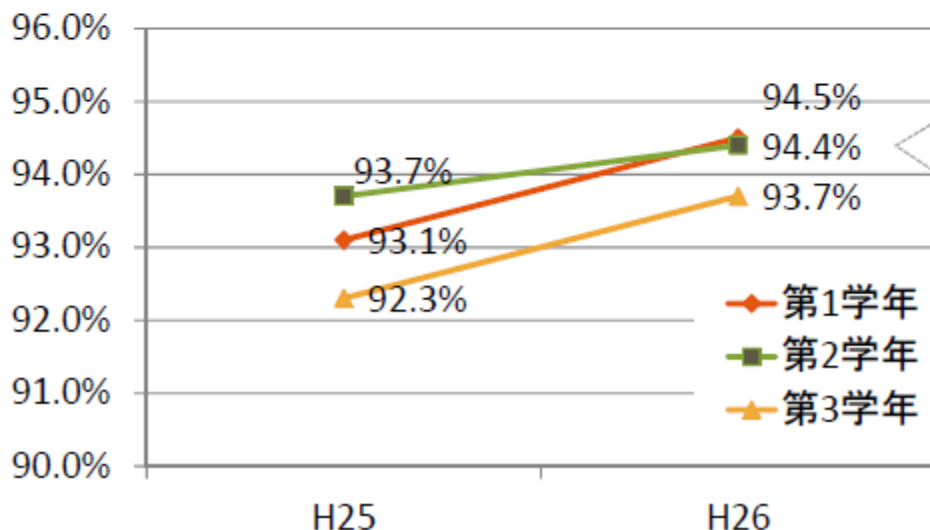
検索！ 各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定のための手引き(文部科学省)http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1332306.htm

英語 中学校におけるパフォーマンス等の評価の現状

- 「話すこと」や「書くこと」の能力を評価するスピーキングテストやライティングテスト等を実施している学校は、第1学年では94.5%で、平成25年度の93.1%から1.4ポイント上昇、第2学年では94.4%で、平成25年度の93.7%から0.7ポイント上昇、第3学年では93.7%で、平成25年度の92.3%から1.4ポイント上昇している。

パフォーマンステストの状況

スピーキングテストやライティングテスト等のパフォーマンステストの実施状況



具体的な実施内容	
スピーキングテスト	スピーチ
	インタビュー(面接)
	プレゼンテーション
	ディスカッション
	ディベート
ライティングテスト(エッセイ等)	
その他	

「全国学力・学習状況調査における中学校の英語の実施に関する中間まとめ」
(文部科学省)より

「パフォーマンス評価」

知識やスキルを使いこなす(活用・応用・統合する)ことを求めるような評価方法。
論説文やレポート、展示物といった完成作品(プロダクト)や、スピーチやプレゼンテーション、協同での問題解決、実験の実施といった実演(狭義のパフォーマンス)を評価する。

「ルーブリック」

成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語(評価規準)からなる評価基準表。

尺度	IV	III	II	I
項目	…できる …している	…できる …している	…できる …している	…できない …していない

記述語

ルーブリックのイメージ例

「ポートフォリオ評価」

児童生徒の学習の過程や成果などの記録や作品を計画的にファイル等へ集積。
そのファイル等を活用して児童生徒の学習状況を把握するとともに、児童生徒や保護者等に対し、その成長の過程や到達点、今後の課題等を示す。

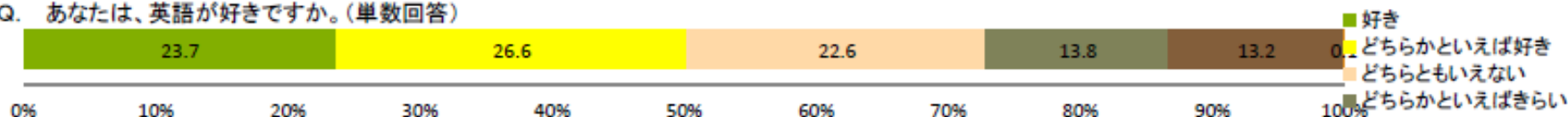
「全国学力・学習状況調査における中学校の英語の実施に関する中間まとめ」
(文部科学省)より

中学校2年生の外国語科に対する意識

英語に対する意識（中2）

○ 生徒の50.3%が「英語が好き、どちらかといえば好き」と回答。

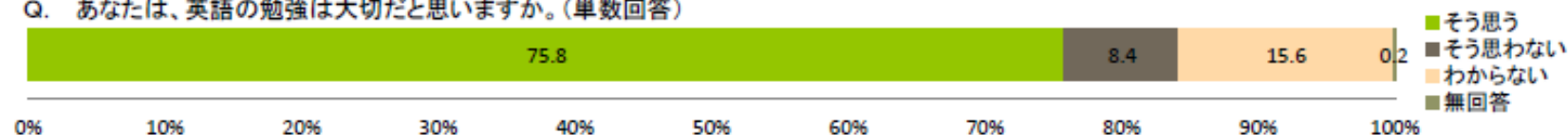
Q. あなたは、英語が好きですか。（単数回答）



英語の勉強に対する意識（中2）

○ 生徒の75.8%が「英語の勉強は大切だと思う」と回答。

Q. あなたは、英語の勉強は大切だと思いますか。（単数回答）

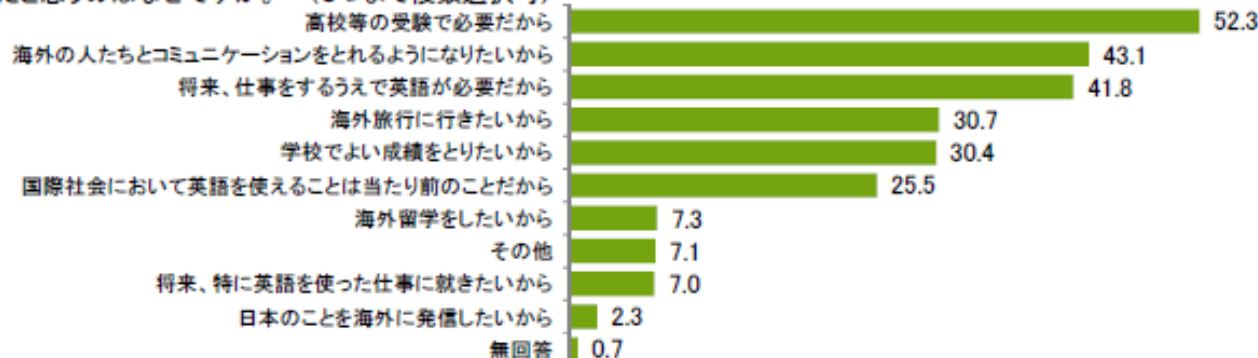


将来の英語使用に対する意識①（中2）

○ 英語の勉強が大切だと思う理由として、生徒の

- ・ 52.3%が「高校等の受験で必要だから」
- ・ 43.1%が「海外の人たちとコミュニケーションをとれるようになりたいから」
- ・ 41.8%が「将来、仕事をするうえで英語が必要だから」と回答。

Q. 英語の勉強が大切だと思うのはなぜですか。（3つまで複数選択可）



全国学力・学習状況調査における中学校の英語の実施について

調査の背景

- グローバル化の進展の中での英語力の重要性の高まり
- 英語教育の様々な課題
- 英語教育のPDCAサイクルの構築の必要性



「生徒の英語力向上推進プラン」

- ①生徒の英語力に係る国の目標を踏まえた都道府県ごとの目標設定
- ②「英語教育実施状況調査」に基づく都道府県別の生徒の英語力の結果の公表
- ③義務教育段階の中学校については、英語4技能を測定する「全国的な学力調査」を国が新たに実施することで英語力を把握
- ④中学校・高等学校・大学での英語力評価及び入学者選抜における英語4技能を測定する民間の資格・検定試験の活用を、引き続き促進

- [中学] ・平成 27・28年度中学3年生の英語力調査
(フイージビリティ調査：6万人)
- ・平成29・30年度 調査設計・予備調査
 - ・平成31年度～ 「全国的な学力調査」実施

○全国学力・学習状況調査において実施すべく、対象とする学年については、義務教育における生徒の英語に関する学力・学習状況を把握・分析するため、他の教科と同様に中学校第3学年の生徒を対象とする。

○学校や生徒の負担を考慮すれば、国語・数学と同一日に実施する必要がある。このため学習指導要領における1単位時間50分が標準とされていることを踏まえ、「聞くこと」、「読むこと」及び「書くこと」の3技能をおおむね45分程度で実施する。「話すこと」の調査については、3技能の調査実施後、当面は、一定程度の期間を設け、教員による対面式での調査を短期で行う方向で検討する。特に「話すこと」の調査を含め、採点に要する期間及び採点の質の確保を図るための期間がどの程度必要であるか等については、調査結果の提供時期を勘案しつつ、事前研修、調査後の検収、実施体制等の在り方について更に詳細に検討することが必要である。

子どもたちのために、こんな授業を

- ・自信をもって自分の考えや思いを発表できる授業
- ・興味や関心を引き起こす授業
- ・生徒が主体的に授業に取り組む授業
- ・生徒同士が関わり合う授業
- ・笑顔や言葉が飛び交う授業
- ・学習内容をわかりやすく理解させる授業
- ・しっかりと発問や指示が伝わる授業
- ・毎時間の学びを積み重ねられる授業
- ・最後まで集中して取り組める授業
- ・様々な児童生徒の学び方に合わせた授業